

一般社団法人日本応用地質学会東北支部 平成28年度 技術講習会 「応用地形学実習」 開催報告

主催：一般社団法人日本応用地質学会東北支部

日時：平成28年6月24日 13:00～17:00 CPD：4単位

場所：仙台市戦災復興記念館 4階第1会議室

受講者：16名

<講習プログラム>

開会挨拶

日本応用地質学会東北支部 支部長 高見智之

1. 応用地形学の役割と最新動向..... 13:00～13:30
災害地質研究部会 高見智之 (応用地形判読士)
2. 平地の応用地形学 (講義および実習) 13:30～15:00
応用地形学研究部会 小林 浩 (応用地形判読士)
3. 山地の応用地形学 (講義および実習) 15:00～16:30
応用地形学研究部会 小俣雅志 (応用地形判読士)
4. 講 評..... 16:30～17:00
応用地形学研究部会長 中曾根茂樹 (応用地形判読士)

1. 応用地形学の役割と最新の動向

地形図の読図により、地盤材質の硬軟、形成過程や過去の地表での物質移動が推定でき、今後起こりうる地盤災害の種類と規模が推測できることを説明していただいた。

また、空中レーザー測量から得られたデータを最新のデジタル地形データに加工して、陰影立体図、カラー段彩陰影図、傾斜量図など、平面上で地形をより強調し、視覚的に分かり易くする技術について紹介していただいた。



2. 平地の応用地形学

平地の地形は浸食や土砂運搬により形成される地形種であり、河川、波および風の営力によって形成される地形であることを説明いただいた。

扇状地の読図では、山地と扇状地の境界、扇状地と蛇行原の境界を判読し、扇状地内の新旧の河道や分水界についても抽出を行った。

河川低地の判読では旧版地形図を用いて、水田と畑作地を色分けすることにより、自然堤防や後背湿地の判読を行った。

実習では、海性低地の旧版地形図と空中写真の判読から、台地と海性低地と人工地盤の判読を行い、各地形種で発生が想定される地盤災害について検討を行った。



3. 山地の応用地形学

山地では、地質構成物質の硬軟や地質構造により溪谷の密度や形状が違ってくるところを説明いただいた。

断層地形としては右横ずれ断層として有名な阿寺断層について判読を行った。

実習では、岩手県奥州市、焼石岳の溶岩地形の集団移動地形について判読を行った。

実務で地すべり地形判読をしている受講者も多いようで、滑落地形と移動土塊の判読については理解度が高かったようであった。



4. 講評

中曽根部会長より、4月に発生した熊本地震の被災地を通る九州横断ルートと豊後街道の地形と地盤災害リスクについてポスターで説明いただいた。

参勤交代ルートであった豊後街道は、熊本地震での被災が比較的少なかったことが紹介された。



最後に

昨年度に実施し好評だったため、今年度も開催した講習会であり、今年は講義と実習が同時進行で行われたため、受講者の手が動く時間が多かったように思う。情報量が多く戸惑う場面も見られたが、受講者各人のスキルアップにつながったものと考えている。

受講者の中には応用地形判読士試験の受験予定者も多くいたので、地形判読の重要性は今後、大きくなっていくと思われる。

最後に、今回も快く講師を引き受けていただいた応用地形学研究会の皆様、大変ありがとうございました。

(文責：村上 智昭)